

古フランス語における付加形容詞と名詞の語順について*)

— 延べ用例総数と形容詞別異なり語数の対比による文法書記述の再検証 —

Ordre de l'adjectif épithète et du nom en ancien français

— Révérification de la description de G. Moignet(1979)

du point de vue de la confrontation du nombre total des exemples

et du nombre des différents types d'adjectifs entre AN et NA —

今田 良信

IMADA Yoshinobu

0. 問題の所在と先行研究

筆者はこれまで、一連の論考、すなわち今田(2009), (2010a), (2012a), (2012b), (2013a), (2013b)を通して、フランス語における古フランス語と現代フランス語の間での「言語構造の変換」¹⁾あるいは「語順構造シフト」²⁾というものについて扱ってきた。それらの論考の中では、フランス語における品質形容詞 (adjectif qualificatif)の付加的用法(以後、単に付加形容詞 (adjectif épithète)ないし形容詞と呼ぶ)の語順、すなわち形容詞(A)と名詞(N)の相対的順序について、巨視的見地³⁾から見た場合、古フランス語ではAN語順が、現代フランス語ではNA語順が、一般的ないし原則的であるということを前提として論を進めた。⁴⁾

その論拠としては、実際、古フランス語に関しては、比較の基準および頻度や程度に関する表現の仕方に様々な差異が見られるものの、AN語順が概ね一般的ないし原則的であるという趣旨の記述がなされている文法書が、比較的多く見られるからである。例えば、

(1) Anglade(1928), p. 264,

“L'épithète précède plus souvent le nom dans l'ancienne langue que dans la langue moderne. Quelques grammairiens attribuent cette construction à une influence germanique; mais ce n'est pas sûr.”

「付加形容詞は、現代〔フランス〕語よりも古〔フランス〕語における方がより頻繁に名詞の前に来る。何人かの文法家の中にはこの構成をゲルマン語の影響とする者もいるが、定かではない。」(拙訳) (下線部筆者、〔 〕内筆者補足、以下同様)

(2) Raynaud de Lage(1975), p. 39,

“; cependant l'adj. épithète précède très généralement le nom.”

「しかしながら、〔古フランス語においては〕付加形容詞は非常に一般的に名詞の前に来る。」(拙訳)

(3) 島岡(1982), p. 223,

「〔付加形容詞の位置については〕古フランス語では名詞の前に置かれることが多かった。ゲルマン語の影響によるものと思われる:」

他に、これらと同様の記述が見られるものとして、Kibler(1984), p. 65; Ménard(1988), p. 118; Bonnard & Régnier(1989), p. 194 が挙げられる。

しかし、頻度ないし程度の度合の違いを除いて、「一般的ないし原則的」という以上に、さらに詳細に踏み込んだ具体的記述は見られない。また、これまで実際に古フランス語の様々なテキストに触れてきた筆者の経験的実感からすれば、「付加形容詞は一般的に名詞の前に来る」ということが当て嵌まらないと思われる程度に、形容詞によっては、形容詞後置の事例も散見される場合があることは否めない。ただし、その実態が、一体如何なる理由から生じるものなのか、また「一般的」と言う以外に何か別のルールに則っているのかについては、俄に説明はつかない。

一方で、形容詞の位置は全く決まっていなかったとする次のような記述もある。

(4) Rickard(1989), p. 54,

“The position of adjectives is very unsettled: suffice it to say that even ethnic adjectives, adjectives of colour, and adjectives of technical category could and frequently did precede the substantive.”

「形容詞の位置は、全然決まっていなかった。次のことを指摘するだけで十分だろう。民族名の形容詞、色彩の形容詞、技術関係の部類の形容詞でさえ、〔現代フランス語なら実詞の後に来るのが普通のもの〕実詞の前に立つことができたし、実際頻繁にその例が見られた。」(伊藤・高橋訳)

また、形容詞の前置・後置どちらの方が一般的ないし原則的であるのか、はっきり述べていないもの(Moignet(1979)〔後述〕, Buridant(2000))もある。古フランス語の「文法書」ではないが、Jensen(1990)もこの立場に近いと言えよう。

(5) Jensen(1990), p. 83(§ 182),

“The position of the attributive adjective in respect to the noun it modifies is essentially a stylistic and rhythmical problem, which is not amenable to grammatical analysis. A great amount of freedom prevails, making it next to impossible to infer any rigidly observed rules.”

「限定形容詞が名詞を修飾する際のその位置は、本質的に文体や韻律の問題であり、文法分析に素直に従うものではない。多大な使用の自由度が勝り、厳格に観察される如何なる規則を推論することもほとんど不可能にしている。」(拙訳)

更に、付加形容詞の位置について特に触れていないもの(Faral(1941), Einhorn(1974), Foulet(1980), Hasenohr(1993), Joly(1998), Revol(2000))も少なくなかった。

そこで、本稿では、古フランス語における付加形容詞と名詞の語順の問題について、今田(2014)で行った、文法書記述の検討・比較、およびテキストの実相に照らして浮び上がってきた問題点・矛盾点全般を踏まえた上で、この問題について、まだ小さな範囲の調査ではあるが、具体的な検討を行ってみたい。その際、上述のように、従来はそこまで踏み込んで説明されていないのであるが、「一般的ないし原則的」という記述が本当にその通りと言えるのか、またその通りであるなら、その記述の裏付けとしてどういう基準でそうであると言い得るのかという証拠を、実際のテキストに基づいて実証的に明らかにしてみたい。

1. 本稿で扱う資料体について

古フランス語の具体例を調べる資料体として、13世紀前半に成立したとされる下記の散文作品2点を使用することにする。その理由は、以下で問題にするMoignet(1979)の記述において同じ資料を対象としており、それを実際に検証するためである。

M.A.: *La Mort le roi Artu*, Roman du XIII^e siècle, éd. J. Frappier, TLF, Genève/Paris: Droz/Minard, 1964. [現代語訳: *La mort du roi Arthur*, traduit par M. Santucci, Paris: Honoré Champion, 1991.]

Q.G.: *La Queste del saint Graal*, Roman du XIII^e siècle, éd. A. Pauphilet, CFMA, Paris: Honoré Champion, 1980². [現代語訳: *La Quete du Saint Graal*, traduite par E. Baumgartner, Paris: Honoré Champion, 1979.]

2. 今田(2014)で指摘された形容詞と名詞の語順に関する諸問題

今田(2014)の中で指摘された、古フランス語における形容詞と名詞の語順に関する問題を箇条書きにして示せば、以下の通りである。⁵⁾

- ①前置例と後置例それぞれにおける延べ用例総数と形容詞別異なり語数の対比の問題
 - ②色彩形容詞の位置のゆれの問題
 - ③付加形容詞一般の位置のゆれに関する問題
 - ④付加形容詞の位置によって生み出される効果の説明について、前置と後置についての説明が真反対になっているように思われるMoignet(1979)とMénard(1988)の記述の相違の問題
 - ⑤前置と後置という位置の相違のみによって区別される価値(の有無)に関する問題
- 以上のうち、②、③、④、⑤については、すぐに解決することが難しいと考えられるので、本稿では、これらのうち、①のみについて検討することにしたい。

3. Moignet(1979)の記述とその問題点

古フランス語の文法書の中で、0.でも触れたが、付加形容詞と名詞の語順に関して、形容詞の前置・後置の何れかが一般的ないし原則的であるとは明言していないものの、比較的詳しく記述しているものとして、Moignet(1979)を挙げるができる。

(6) Moignet(1979), p. 345.

“L’adjectif qualificatif peut être antéposé ou postposé au substantif. Sa place prend une signification assez précise.”

「品質形容詞は名詞の前にも後にも置かれ得る。その位置により、かなり明確な意味〔の違〕を帯びる。」(抽訳)

そして、形容詞が前置される場合の説明⁶⁾のあと、Q.G.の1-9頁、およびM.A.の1-25節に現れる、形容詞が名詞に前置された延べ用例数が、それぞれ58例、および65例であることと、その中に含まれる形容詞別延べ用例数の内訳が、網羅的ではないが、挙げられている。また、形容詞が後置される場合については、Q.G.およびM.A.の同様の範囲から、ここでは個別的に8例ほどの用例のみが示されている。

そこで、筆者には、次のような疑問点が浮かんだ。まず、1つは、その用例の中に、形容詞の比較級や動詞の現在分詞に由来する形容詞も含まれていたという点である。用例の対象となるのが品質形容詞であり、しかも各用例の統語的条件は揃えるべき必要があると

いう観点からすれば、これは少し不適切ではないかと思われる。さらに何よりも、2つ目として、前置例と後置例それぞれにおける延べ用例総数と形容詞別の異なり語数の正確な数値およびその対比について何も触れられていない点である。名詞に対する付加形容詞の前置・後置の何れが一般的あるいは原則的であるのかが問題となっているのに、なぜ出現事例の延べ用例総数や形容詞別異なり語数を網羅的に数え、対比してみないのであろうかという根本的な疑問が湧いたのである。

4. 再調査と分析

そこで、限られた範囲であるが、Moignet(1979), p. 345に示されたテキストの範囲に合わせて、Q.G.の1-9頁、およびM.A.の1-25節に現れる、単独の付加形容詞の原級についてのみ、改めて筆者が用例数を数え直し、アルファベット順に並べて纏めたものが〔表1〕、〔表2〕である。⁷⁾ 下線を付した形容詞は、同一資料内において前置と後置との間でゆれ

〔表1〕 Q.G. 付加形容詞用例数(1-9頁)

	前置例		後置例	
	異なり語	数	異なり語	数
形容詞別延べ用例数	biaus	9	<u>granz</u>	1
	blans	2	<u>merveilleux</u>	1
	bons	1	<u>noviax</u>	2
	estranges	1	perilleux	4
	gentiz	1	precios	1
	<u>granz</u>	14	prochains	1
	hauz	8	reonz	6
	<u>merveilleux</u>	2	vermeiz	4
	mestre	1		
	<u>noviax</u>	3		
riches	3			
sainz	4			
計	異なり語12種	49	異なり語 8種	20

〔表2〕 M.A. 付加形容詞用例数(1-25節)

	前置例		後置例	
	異なり語	数	異なり語	数
形容詞別延べ用例数	biaus	10	anglesches	1
	bons	6	crestiens	1
	derriens	2	destres	2
	<u>droiz</u>	1	<u>droiz</u>	1
	folz	2	estranges	1
	gentiz	3	morteus	1
	granz	35	noviaus	2
	hauz	2	oscurz	1
	lointeins	1	reonz	3
	riches	1	sauvajes	1
	seinz	2	senestres	1
	vieuz	1	vermeils	2
計	異なり語12種	66	異なり語12種	17

の見た形形容詞である。

これらの表からは、次の点が指摘できよう。先ず、〔表1〕のQ.G.では、前置例の延べ用例数は49例、後置例の延べ用例数は20例であるから、それらを合わせた延べ用例総数69例の百分率で見ると、前置例は約71%、後置例は約29%を占め、延べ用例総数から見た付加形容詞の出現頻度は、前置例が後置例の約2.5倍ということになる。一方、形容詞別の異なり語数の点から見ると、前置例の形容詞は12種、後置例の形容詞は8種であり、そのうち両者の間でゆれて(=重なって)いるものが3種ある。百分率で見ると、形容詞の異なり語総数は17種となり、前置例は約71%、後置例は約47%で、前置例と後置例がゆれて出現するものが約18%ということになる。

次に、〔表2〕のM.A.では、前置例の延べ用例数は66例、後置例の延べ用例数は17例であるから、それらを合わせた延べ用例総数83例の百分率で見ると、前置例は約80%、後置例は約20%を占め、延べ用例総数から見た付加形容詞の出現頻度は、前置例が後置例の4倍ということになる。一方、形容詞別の異なり語数の点から見ると、前置例の形容詞は12種、後置例の形容詞も12種であり、そのうち両者の間でゆれているものが1種ある。百分率で見ると、形容詞の異なり語総数は23種となり、前置例も後置例も約52%で、前置例と後置例がゆれて出現するものが約4%ということになる。

以上を総合すれば、延べ用例総数から見た付加形容詞の出現頻度は、Q.G.では、前置例が後置例の約2.5倍、M.A.では、4倍であるので、この点からすると、「古フランス語では名詞の前に置かれることが多かった。」と言うことはできるであろう。一方、付加形容詞の異なり語数の点から見ると、Q.G.では、前置例は12種の約71%、後置例は8種の約47%で、ゆれている形容詞が3種の約18%であり、M.A.では、前置例も後置例も12種の約52%で、ゆれて出現している形容詞が1種の約4%であるので、この点から見ると、Q.G.では、後置例よりも前置例が多くやや開きがあるものの、M.A.では、前置例と後置例に差はないということになる。

そこで、最後に、〔表1〕と〔表2〕の結果を併せたものが〔表3〕である。⁸⁾前置例の延べ用例数は115例、後置例の延べ用例数は37例であるから、それらを合わせた延べ用例総数152例の百分率で見ると、前置例は約76%、後置例は約24%を占め、延べ用例総数から見た付加形容詞の出現頻度は、前置例が後置例の3倍強ということになる。一方、形容詞別の異なり語数の点から見ると、前置例の形容詞は17種、後置例の形容詞も同じく17種であり、そのうち両者の間でゆれているものが5種ある。百分率で見ると、形容詞の異なり語総数は29種となり、前置例も後置例も約59%で、前置例と後置例がゆれて出現するものが約17%ということになる。

[表3] M.A. (1-25節) + Q.G. (1-9頁) 付加形容詞用例数

	前置例		後置例	
	異なり語	数	異なり語	数
形容詞別延べ用例数	—		anglesches	1
	biaus	19	—	
	blans	2	—	
	bons	7	—	
	—		crestiens	1
	derriens	2	—	
	—		destres	2
	<u>droiz</u>	1	<u>droiz</u>	1
	<u>estranges</u>	1	<u>estranges</u>	1
	fols	2	—	
	<u>granz</u>	49	<u>granz</u>	1
	gentiz	4	—	
	hauz	10	—	
	lointeins	1	—	
	<u>merveilleux</u>	2	<u>merveilleux</u>	1
	mestre	1	—	
	—		morteus	1
<u>noviax</u>	3	<u>noviaus (noviax)</u>	4	
—		oscurz	1	
—		perilleux	4	
—		precios	1	
—		prochains	1	
—		reonz	9	
riches	4	—		
sainz(seinz)	6	—		
—		sauvajes	1	
—		senestres	1	
—		vermeils(vermeiz)	6	
vieux	1	—		
計	異なり語17種	115	異なり語17種	37

5. 本稿での結論と今後の課題

以上、古フランス語における形容詞と名詞の語順について、Moignet(1979)の記述内容を、限られた範囲ではあるが、実際のテキストに基づいて筆者なりに再検証してみた。その結果、古フランス語において「付加形容詞は一般的ないし原則的に名詞の前に来る」という記述は、現時点までの調査では、延べ用例総数に基づく付加形容詞の出現頻度の観点から見た場合に限られ、形容詞別の異なり語数の観点から見れば、そうとは言えないということになる。今回は、Moignet(1979)の調査範囲の再検証であって、その範囲での問題の所在および再検証の数値とそれに伴う結果は詳らかにできたと

考えるが、特定の資料体全体の数量的あるいは統計的処理は行っていないため、筆者なりの、もう少し資料範囲の広い調査・分析による数値の提示はできなかった。従って、その点は今後の課題の1つである。

さらに、本稿の次段階の考察として、前置例と後置例をめぐる、付加形容詞自体やその置かれた環境に関する特徴がどうなっているのかについても分析してみる必要がある。例えば、韻律的な観点から見てみるなら、付加形容詞自体については、単純に形容詞の長さ（音節数）が、延べ用例総数と形容詞別の異なり語数それぞれの平均値でどのようになっているのか、また音節数ごとの用例数はどのような分布になっているのか、などが考えられよう。付加形容詞の置かれた環境については、形容詞と被修飾語である名詞との長さの関係はどのような分布を示しているのか、というようなことも問題となろう。さらに、韻律的な観点だけでなく、意味的な観点からの考察や、個別形容詞の出現頻度の観点からの考察も必要かもしれないが、これらについても次稿以降の課題としたい。

また、古フランス語における形容詞と名詞の語順に関して今田(2014)で明らかにした諸問題のうち、未解決の問題点②～⑤も残された課題と言えよう。いずれも容易に答えが得られるものではないと考えるが、今後いろいろ工夫しながら検討してみたい。

注

* 本稿は、日本ロマンス語学会第52回大会（京都外国語大学，2014年5月31日（土））における口頭発表をもとに、加筆・修正を施したものである。

1) 今田(2010a), (2012b)を参照のこと。

2) 今田(2012a), (2013a), (2013b)を参照のこと。

3) 今田(2009), (2010a), (2010b), (2011)を参照のこと。

4) 今田(2010a), (2012a), (2012b), (2013a), (2013b)を参照のこと。

5) 各問題点の内容の詳細については、今田(2014)を参照のこと。

6) 詳しくは、Moignet(1979)の同所および今田(2014), p. 23を参照のこと。

7) なお、各形容詞は主格(cas sujet)の語形で示してある。

8) 〔表3〕は、M.A.とQ.G.の用例数を合わせたものなので、〔表1〕および〔表2〕の場合とは異なり、下線を付した形容詞も同一資料内において前置と後置との間でゆれの見られたものとは限らないことに注意されたい。前置例、後置例に分けて、形容詞別に用例の出現作品を示せば、次の通り。前置例：droiz[M.A.], estranges[Q.G.], granz[M.A., Q.G.], merveilleux[Q.G.], noviax[Q.G.];後置例：droiz[M.A.], estranges[M.A.], granz[Q.G.], merveilleux[Q.G.], noviaus(noviax)[M.A., Q.G.]。

参考文献

- 今田良信(2009):「フランス語歴史言語類型論の試み」,『ニダバ』, 38, pp.1-10.
- 今田良信(2010a):「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から —」,『ニダバ』, 39, pp.31-40.
- 今田良信(2010b):「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」,『ロマンス語研究』, 43, pp.21-30.
- 今田良信(2011):「日本語・フランス語の諸相対照研究 — フランス語の特色を中心として —」,『ニダバ』, 40, pp.10-19.
- 今田良信(2012a):「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 語順類型論的観点から見えてくるもの —」,『ニダバ』, 41, pp.117-126.
- 今田良信(2012b):「古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換」,『ロマンス語研究』, 45, pp.21-30.
- 今田良信(2013a):「フランス語語順構造シフトの過程における一般言語学的言語作用」,『ニダバ』, 42, pp.30-39.
- 今田良信(2013b):「フランス語における語順構造シフトの通時的方向性 — 平叙文および疑問文のS/V語順構造の観点から見えてくるもの —」,『ロマンス語研究』, 46, pp.77-86.
- 今田良信(2014):「古フランス語における付加形容詞と名詞の語順に関する考察 — 文法書記述の疑問点,矛盾点に着目して —」,『ニダバ』, 43, pp.21-30.
- 佐藤房吉, 他(1991):『詳解フランス文典』, 駿河台出版社.
- 島岡茂(1982):『古フランス語文法』, 大学書林.
- Anglade, J. (1928³): *Grammaire élémentaire de l'ancien français*, Paris: Armand Colin.
- Bonnard, H. & Régnier, C. (1989): *Petite Grammaire de l'ancien français*, Paris: Magnard.
- Buridant, C. (2000): *Grammaire nouvelle de l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Dubois, J. et al. (1973): *Dictionnaire de linguistique*, Paris: Larousse.
- 〔福井芳男, 他編訳(1980):『ラールース言語学用語辞典』, 大修館書店〕
- Einhorn, E. (1974): *Old French: A Concise Handbook*, London: Cambridge University Press.
- Faral, Ed. (1941): *Petite grammaire de l'ancien français*, Paris: Hachette.
- Foulet, L. (1980³): *Petite syntaxe de l'ancien français*, Paris: Champion.

- Hasenohr, G. (1993²): *Introduction à l'ancien français de Guy Raynaud de Lage*, Paris: SEDES.
- Jensen, F. (1990): *Old French and Comparative Gallo-Romance Syntax*, Tübingen: Max Niemeyer.
- Joly, G. (1998): *Précis d'ancien français*, Paris: Armand Colin.
- Kibler, W. W. (1984): *An Introduction to Old French*, New York: The Modern Language Association of America.
- Ménard, Ph. (1988³): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: Bière.
- Moignet, G. (1979²): *Grammaire de l'ancien français: Morphologie - Syntaxe*, Paris: Klincksieck.
- Perret, M. (1998): *Introduction à l'histoire de la langue française*, Paris: SEDES.
- Raynaud de Lage, G. (1975⁹): *Introduction à l'ancien français*, Paris: SEDES.
- Revol, T. (2000): *Introduction à l'ancien français*, Paris: Nathan.
- Rickard, P. (1989²): *A History of the French Language*, London: Unwin Hyman.
- [伊藤忠夫・高橋秀雄訳(1995): 『フランス語を学ぶ人のために』, 世界思想社]
- Wartburg, W. von (1971²): *Evolution et structure de la langue française*, Berne: Francke.